

— 第百貳拾参号 —

(2013年春号)

橋口博之作陶展

春の訪れと共に、いつものようにいつものところで橋口作陶展を開きます。今回は、三越日本橋本店で連続11回目、ハレのうつわをテーマに、3月13日(水)～19日(火)まで開きます。継続は力なりと申しますが、東京では、高島屋二子玉川店で3度、三越日本橋本店では11度目になり、関東各地のお客様とすっかり親せきのような間柄になりました。特に、女優の真野さんご家族とは20数年来のお付き合いになり、テレビドラマ「ディナー」のソムリエ役柴本幸ちゃんがお箸を持てるようになってからです。光陰矢の如しです。橋口作陶展へも欠かさずご来場下さいませ。常連のお客様が今年は来て下さるだろうかとハラハラドキドキワクワクしながら、橋口も湯たんぽを抱きながら時間を忘れて絵筆に集中しています。デザイナー兼職人の崇高な姿を間近で眺められて、私たちも幸せ者です。



『橋口博之作陶展』
ハレのうつわ

会期：3月13日～19日
(会期中、橋口連日來場)
会場：日本橋三越本店
本館5階 特選和食器

春は何かとお祝いごとの多い季節です。
おめでたい席を彩る新作の酒器や
暮らしのうつわを揃えてみました。
皆様のお越しをお待ちしております。

世界時計 藤原和博プロデュース SPQR arita 完成



日本の伝統工芸にこだわったネオジャパネスク（新しい日本風）として、有田焼文字盤（初回限定100個）に挑戦しています。

今年2月中旬頃、長野県諏訪時計企画室会社社長清水様から、試作品が完成しましたという朗報が入りました。

実は、清水様が昨年6月1日、樋渡武雄市長の紹介でしん窯を訪ねられました。高級時計を有田焼を生かして製作したいという依頼でした。話を聞いているうちに、様々なこだわりに気づきました。特に嬉しかったのは、清水様が描いているイメージのお皿を持って来て下さいましたが、まさかと思いましたが、青花ブランド（1976～）草創期のオランダ船小判小皿でした。香港駐在の時買い求めて、いまだに数十年来手元に置いて使っているというお話を伺い、しん窯が取り組まないわけにはいかないと思いました。

開発コンセプトは、

- ①世界中のフォーマルな場で恥ずかしくない風格と気品
- ②日本の技術が生きている日本製造
- ③ネオジャパネスク（新しい日本風）な飽きのこないデザイン

であり、商品コンセプトは、「凜とした覚悟」「静謐への祈り」です。

日頃私たちが試行錯誤しながらも青花ブランドの原点を忘れないように心がけている姿勢を、分かり易い言葉に置き換えて提案して下さいました。

しん窯は「後世に残るやきものを創る」を理念として、本物や良い物を求めて職人技にこだわり、いつまでも飽きのこない暮らしの器づくりを続けてきました。その延長線上に、いつまでも手放したくない時を刻む世界時計に挑戦できる事は、無上の喜びでした。ただし、ファインセラミックスに私たちがあこがれてやまない初期有田の磁肌をいかにしてかもし出すか、そして暖かな温もりのあるファインセラミックスを小さな文字盤にいかにして表現するか、高いハードルでした。チーム有田の知恵と経験を繋いで、満足のいく文字盤とリューズが、約9ヶ月間という時間をかけて完成しました。

そして、諏訪で組み立ててこのほど、世界に誇れる藤原和博プロデュース SPQR arita 試作品が完成しました。

これから文字盤やリューズの焼成に取り掛かり、今年4月から予約販売に間に合うように懸命に動いています。映像でしか見ていませんので、一日も早く時計の現物を手にとって見たいという衝動にかられています。

ちなみに、1個294,000円（税込）です。初回限定100個ですが、4月より受け付けます。お問い合わせは、しん窯0955-43-2215梶原まで。

「スヌーピー」と日本の「匠」がコラボ

アメリカンポップカルチャーの代表「スヌーピー」のお話をいただいたのは去年の7月。世界時計企画とほぼ同時期のスタートでした。佐賀県窯業技術センターの強力な協力を得て原型が完成、このほど1個だけ上絵付で桜文スヌーピーが完成しました。大型で複雑な形状でしたが、試行錯誤を繰り返しようやく完成。精度の高い仕事に従事し、匠の真骨頂でした。是非一見の価値あります。

SNOOPY JAPANESQUE 「スヌーピー×日本の匠 展」

日時：2013（平成25）年4月17日（水）～5月6日（月・祝）【20日間】
10時～20時（最終日は17時閉場、入場は閉場の30分前迄）

会場：松屋銀座8階イベントスクエア

主催：スヌーピー・ジャパネスク制作委員会

です。私たちが今から飛んでいきたい気分です。今回の「日本の伝統と匠が織りなすスヌーピーの世界展」の企画にあたり、主催者の最大の目的は次のとおりです。以下、開催概要から抜粋しました。

アメリカを代表する大衆芸術（ポップカルチャー）＝スヌーピーの世界と、日本の伝統工芸というテクネ、そして日本文化ならではの自由な発想との出会いです。これまでに見た事のない、世界の融合や、洋の東西を超えた普遍的感性を表現することで、新たな文化をつくり出し、たくさんの人びとにその可能性を感じてもらうことこそが、このプロジェクトの最も意図するところです。この「文化的化学反応」とも言える素晴らしい出会いを体験してください。

春の陶器市

春の陽光に出会うと、しん窯では陶器市のお話が出てきます。新商品のテーマは？おもてなしは？などとブレインストーミングが始まります。毎年この頃になると、ハラハラドキドキワクワクしてくるから不思議です。有田に生まれて育てて68年ですが、物心つく頃から陶器市の非日常体験は忘れられず、様々なモノと人との出会いを重ねてきました。陶器市の前身である品評会が1896（明治29）年。今のような市が始まったのは1915（大正4）年。日露戦争で1回、太平洋戦争で6回中断していますが、幸い私たちは1948（昭和23）年から65回連続して体験しています。文字通り物心ついた頃から陶器市の賑わいが染みついているのです。

また、市を契機に一気に夏へと向かっていきます。夏生まれの私にとっても、待ち遠しい有田のビッグイベントなのです。

しん窯 青花 春の陶器市

4月28日（日）～5月5日（日・祝）開催

詳細は、HPにて随時ご紹介していきます。

あきびんご先生 来窯

絵本作家あきびんご先生が今年初めて来窯されました。今回は、生まれ故郷尾道の蒲鉾商店桂馬様100周年記念引出物を自らプロデュースされ、描きに來られました。あきびんご先生の作陶風景にはいつも驚かされます。絵筆の他に、スポイトや注射器などを駆使して自由奔放に絵付けを楽しまれます。まるで魚が泳いでいるようです。お昼を我が家の台所でご一緒した時、三代目愛猫タマをすばやくドローイングして下さいました。早速額に入れ、招き猫として事務所入口に飾っています。窯あがりを見に、桂馬蒲鉾商店のご主人と一緒に後日再来窯されます。ホッとする染付UDマグとタマのドローイングを見ていただく日が待ち遠しい今日この頃です。

有田の青花専門店で、偶然このマグカップと出会ったのは、6～7年ほど前。次の日に、それを作っているしん窯を訪れ、さっそく描かせていただいた。そのなかの1つが、知人から宮城県にお住まいのお母さんへプレゼントされた。そして、3月11日。あの大地震。すべての食器類が割れくだけたなか、このマグカップだけが無事だったようだ。まさしく、奇跡のマグである。

2013年 4月吉日



あきびんご

1948年生まれ。広島県生まれであることからこのペンネームが付いた(安芸・備後)。東京藝術大学日本画専攻卒業。絵画や染付などの個展活動を行っている。還暦を過ぎてから、絵本作家となる。絵本『したのどうぶつえん』で第14回日本絵本賞を受賞。

おもな著作絵本
『したのどうぶつえん』(くもん出版)
『あいうえおん』(くもん出版)



今回描かれたマグカップ

